

# 書評と紹介

那波泰輔著

## 『「わだつみ」の歴史社会学

——人びとは「戦争体験」を  
どう紡ごうとしたのか』



評者：福間 良明

### 「集団」への着目

戦没学徒遺稿集『きけわだつみのこえ』（東京大学協同組合出版部，1949年）の大ヒットを受けて，1950年に日本戦歿学生記念会が発足した。わだつみ会と通称されるこの団体は，戦後日本において反戦平和運動を牽引した。鶴見俊輔，安田武，橋川文三，渡辺清といった戦中派文化人も多く集い，戦争体験をめぐる思想をさまざまに紡いだことでも知られる。本書はわだつみ会創設からわだつみのこえ記念館の設立（2006年）までの約60年の歴史を跡付け，戦争体験への向き合い方の変化を析出している。

具体的には，機関紙・誌『わだつみのこえ』や会員間の交流を意図して発刊された『わだつみ通信』を見渡し，さらに関係者20名ほどにもインタビューを重ねたうえで，「集団において，制度の変化によりその集団の方針や方向性が変わっていくことで，人びとの認識や『戦争体験』の記述・語り，その受容の仕方がいかに変容していったのか」を考察している（11頁）。

わだつみ会は，共産党に近い学生運動の影響が強かった第一次，その反省をふまえて「思想団体」を掲げ，戦中派世代が中核を担った第二次，それに反発した若い世代が多く脱会したのち，「天皇問題」を掲げて再び活性化した第三次，その中心となった渡辺清が死去し，さまざまな会員が組織運営の実務に携わるようになったそれ以降の時期に区分される。それを念頭に，本書は以下のような構成で叙述されている。

- 序章 問題意識と先行研究，研究目的
  - 一 問題意識の概要とテーマ
  - 二 先行研究
  - 三 分析視座
  - 四 本書の方法と使用する資料
  - 五 本書の構成
- 第一章 わだつみ会における「思想団体」の定義と変遷——「思想」の言葉に着目して
  - 一 はじめに
  - 二 第一次わだつみ会の成立と解散
  - 三 第二次わだつみ会と「思想団体」という方向性
  - 四 第三次わだつみ会における「思想団体」の拡張
  - 五 おわりに
- 第二章 わだつみ会における加害者性の主題化の過程——一九八八年の規約改正に着目して
  - 一 はじめに
  - 二 第三次わだつみ会と一九七〇年代——「天皇問題」への着目
  - 三 一九八〇年代のわだつみ会
  - 四 おわりに
- 第三章 非戦争体験者による戦争体験者の戦争責任の追及——戦争責任を語るとはどういうことか
  - 一 はじめに
  - 二 わだつみ会への田口裕史の関わり
  - 三 記述することと語ること
  - 四 おわりに
- 第四章 わだつみのこえ記念館の設立過程と現在——繋ぐ場所としての記念館
  - 一 はじめに
  - 二 第一次わだつみ会と第二次わだつみ会における記念館構想
  - 三 一九九〇年代における記念館構想
  - 四 「わだつみのこえ記念館」設立へ
  - 五 おわりに
- 終章 結論と今後の課題
  - 一 結論と得られた知見
  - 二 今後の課題と展望

ちなみに、第一次わだつみ会（1950-58年）の機関紙『わだつみのこえ』の縮刷版は1992年に八朔社より出されているが、それはすべてを取めたものではない。著者は、縮刷版未収のものもアーカイブ化しながら研究を進めている。わだつみ会の通史を扱った研究としても、意義深い学術書である。

### 本書の概要と学術的意義

概要を紹介しておく、第一章「わだつみ会における『思想団体』の定義と変遷」では、日本共産党の影響が強かった第一次わだつみ会と、その解散の翌年の1959年に「行動団体」ではなく「思想団体」を掲げて発足した第二次わだつみ会をおもに扱い、その移行プロセスに着目している。著者によれば、第一次わだつみ会は共産党の内紛に振り回されて消滅したとされるが、そればかりではなく、他団体との協力に伴う独自色の後景化、事務所賃料の発生による財政問題など、複数の要因が絡んでいたという。にもかかわらず、第二次わだつみ会は、第一次わだつみ会を政治的な「行動団体」と規定したうえで、それとは異なる戦争体験の「思想」に軸足を置こうとした。

とはいえ、第二次わだつみ会は、安保闘争やベトナム反戦運動など、同時代の動向との関わりのなかで、「思想団体」の定義を拡張し、それなりに「行動」に結びつく面もあった。第二次わだつみ会は、戦争体験への向き合い方をめぐる世代間対立が激しさを増し、若い世代が大量に抜けたこともあり、1970年に第三次わだつみ会に移行した。そこでは事務局長渡辺清の主導により「天皇問題」が打ち出された。そのことは、「思想団体」の定義の拡張であったのと同時に、「学徒兵を祈念する」というわだつみ会の前提が共有されにくくなったことにつながったとの指摘は、興味深い。以降の章でたび

たび振り返られる1970年代までの通史を扱ったのが、この章である。

第二章「わだつみ会における加害者性の主題化の過程」は、第三次わだつみ会が1988年に規約改正を行い、「戦争責任」の文言が入ったことに着目し、それによりわだつみ会が「行動団体」を志向するようになったことを指摘している。

続く第三章「非戦争体験者による戦争体験者の戦争責任の追及」では、1980年代後半から90年代にかけてわだつみ会に関わり、『戦後時代の戦争責任』の著者でもある田口裕史の思想を浮かび上がらせている。田口本人へのインタビューもふまえながら、戦争責任や加害責任をめぐる語りの定型化の問題が指摘されている。「九〇年代のわだつみ会の戦争責任や加害の追及は、アジアのなかで戦後補償の問題などが生じていくなかで、重要なものであった。ただ、そうした戦争責任の追及などは、戦争体験者が社会に向けて発信するときや公の場で発信する際に、その語りに定型化を促す面もあったのである」（103頁）との指摘は、重要なものである。

第四章「わだつみのこえ記念館の設立過程と現在」では、2006年に開館したわだつみのこえ記念館の設立過程を跡付けながら、戦没学徒の遺書の展示などを通して、戦争体験者や遺族、学生ら多様な世代がつながりを持てる場としての記念館の機能が論じられている。

そして最後の終章では、第一から四章までをまとめ、振り返ったうえで、今後の課題や展望が記されている。

日本戦没学生記念会の歴史を扱った研究は、これまでもなかったわけではないが、1950年代の第一次わだつみ会から2000年代の動向まで、広く見渡した研究は、皆無に近い。本書は、わだつみ会の半世紀以上の歴史をあえて描

こうとしている点で、貴重なものであろう。復刻版に収められていない第一次わだつみ会機関紙の掘り起こし、会員の交流促進を意図して出された『わだつみ通信』への目配り、90年代のわだつみ会において重要な問題提起を行った田口裕史の思想の整理など、本書は意義深い点に満ちている。

### 次作への期待

本来であれば、ここで記述を終えるところではあるが、学術誌での書評なので、些末なことかもしれないが、少しばかり疑問点などにもふれておきたい。

本書は文字通りわだつみ会の歴史を扱うものであり、その点は詳述されている。だが、わだつみ会史としては新たな知見が示されてはいるものの、それがより広い文脈にどう位置づけられるのか。その点は、もう少し知りたいところではある。わだつみ会という一団体の歴史が、戦争体験をめぐるどのような動向をいかに代表するのか、それが従来の見取り図をどう改めることにつながるのか。読み手の見方によっては、わだつみ会の話に閉じているように見えてしまうかもしれない。本書が歴史学ではなく（歴史）社会学に根差すものであれば、より一層、そのことの説明は求められよう。

また、それにも関連するが、各章のつながりがいささかわかりにくいように思われた。本書はゆるやかに時系列な章構成にはなっているが、第一章が第一次から三次わだつみ会の「行動団体」「思想団体」をめぐる位置づけを広く扱うのに対し、第二章は1988年の規約改正に絞り込んだ叙述となっている。第三章は田口裕史の思想に焦点が当てられ、第四章が記念館設立の動向が論じられている。「思想団体」と「行動団体」をめぐる問題関心は総じて一貫しているものの、各章で扱う時期の幅や対象が異

なっているため、個々の章が独立しすぎている印象を受けたのが、正直なところである。

むろん、博士論文（をもとにした著書）は、多くの場合、既発表論文をまとめたものになりがちだし、その意味で、大なり小なり論文集の様相を帯びるのは仕方ないことではある。だが、それに安住するのではない章構成もあり得たのかもしれない。

それと、これはただの「難癖」でしかないが、ところどころ実証が弱いように思える箇所もないではなかった。たとえば、第二章では、多種多様な人々の入会と1970年代の推薦人制度廃止との関連が指摘されている。その点は興味深いですが、推薦人制度廃止の前後で、ほんとうに入会者の多様性に变化があったのかについて、史料的な裏付けは明示されていない。その以前の第二次わだつみ会でも、まだ文筆活動を本格化させていなかった元「農民兵」の渡辺清が入会するなど、それなりに多様な人々が集っていたようにも思えるのだが、はたして会員の多様性はほんとうにその前後で変わったのだろうか。変わったのであれば、何をもって裏付けられるのか。

また、同じく第二章では、わだつみ会の戦争責任や加害責任への積極的な言及と1980年代の規約改正の関わりが強調されているが、いささか規約を決定的な要因として捉えすぎているようにも見えるのではないだろうか。はたして、会員が規約をことさらに強く意識していたのかどうか。教科書問題や反核運動の高揚、戦後派世代以下の台頭といった同時代の社会的文脈のほうが、影響力としては大きかったようにも思える。規約改正は、それまでのわだつみ会の動向の帰結だったのか、それとも、その後のわだつみ会の方向性を規定づけるものだったのか。なぜ規約改正をかくも重きをおいて論じなければならないのか。

むろん、これらは評者の理解不足もあるかもしれないが、規約改正や推薦制度廃止から演繹的に論を立てるだけでなく、史資料に内在的かつ帰納的に論を進める要素がもう少し強調されていると、(歴史)社会学だけではなく、歴史学においても、より一層説得力を持つものになったようにも思える。

ただ、これらはいくまで、一読者としての「ないものねだり」に過ぎない。先に述べたように、わだつみ会という戦後の社会運動史においても重要な団体を、「歴史」としてだけでは

なく「現在」まで俯瞰し、その通史を描こうとした努力と気概は高く評価されるべきものである。これからの戦争社会学を率いる一人になるであろう著者の第二作を、評者としては心待ちにしている。

(那波泰輔著『「わだつみ」の歴史社会学——人びとは「戦争体験」をどう紡ごうとしたのか』雄山閣、2025年1月、190頁、定価:本体3,000円+税)

(ふくま・よしあき 京都大学大学院教育学研究科教授)